

ベラルーシ留学報告



141121 守屋伶香フローラ

ベラルーシ留学報告

日程

2018年2月13日 羽田空港発

2018年3月23日 羽田空港着

派遣先

2018年2月14日～3月4日 ベラルーシ医科大学

2018年3月4日～3月22日 ゴメリ医科大学

目次

1. ベラルーシ共和国について
2. ベラルーシの医科大学の概要
3. ゴメリ医科大学およびベラルーシ医科大学での実習
4. チェルノブイリ事故の影響と現在の状況
5. ベラルーシの医療システム
6. 放射線量測定
7. 福島の紹介
8. 留学中の生活
9. 文化交流
10. ベラルーシの人々
11. 今後ベラルーシに留学されるみなさん、ベラルーシ留学を考えているみなさんへ
12. 謝辞

1. ベラルーシ共和国について

ベラルーシ共和国は東欧国で、ヨーロッパとロシアをつなぐ重要な役割を担っています。ヨーロッパ最北の内陸国で、ロシア、ラトビア、リトアニア、ポーランド、ウクライナに隣接しています。



ヨーロッパとの位置関係



近隣国との位置関係

約30年前まではソビエト連邦のうちの1国でしたが、1991年のソ連崩壊後に独立しています。今でも旧ソ連諸国と密接なつながりがあり、ロシアにおいては顕著です。ロシア語、ベラルーシ語が公用語ですが人々の多くはロシア語を使っています。自国語を使わないというのは少し奇妙に感じますが、文化、経済、流通の面でロシアとの親交が深くロシア語を使ったほうが便利だという現状で理解できます。

ベラルーシで有名なものについては森林・湖などの自然や、ドラニキをはじめとするじゃがいもの料理、ミルクやチーズなどの乳製品です。これらは後述するチェルノブイリ原子力発電所事故で大きな被害を受けたものとも言えます。また、街を歩いていて目につくのは旧ソ連時代の重厚で巨大な建築物です。そして何と言っても美女の多い国だと断言することができます。

次に、政治や経済、宗教について述べます。

ベラルーシの政治体制を一言で表すとすれば、独裁体制です。2018年現在5期目のアレクサンドル・ルカシェンコ大統領の元に権力は集中し、政府への反対意見を公共の場で述べることはできません。KGBというソ連時代から続く情報組織により逮捕される恐れがあるからです。学校教育やメディアでは政府への信頼を確保するためのプロパガンダが行われています。このような状況でもインターネットの規制はなく、若い世代は他国の友人や親戚、インターネットを通じてベラルーシの政治について情報を得ています。私たち日本人と比べるとかなり政治への関心度は高いと思いました。

次に、経済についてです。ロシアやヨーロッパ諸国、中国に依存しており決して豊かとは言えません。私がとても驚いたのは、平均の給料が月に3万円ほど（医師はさらに低く2万円）ということです。代わりに物価は安く、医療費無料、一部の教育が無料など社会保障は手厚い印象を受けました。

宗教のことについても触れたいと思います。ベラルーシでは80%ほどがロシア正教会、20%弱がカトリックとなっています。その他、ヒンドゥー教、イスラム教などがごく少数あります。日本と共通していると感じたの

は若い世代の宗教観です。若い世代は家の慣習に従って信者となった人が多く、教会に熱心に通うことはなく、中には無神論者の人もいたほどです。

2. ベラルーシの医科大学の概要

ベラルーシには医科大学が4つあり、私たちはそのうちの2つであるベラルーシ医科大学（所在地は首都ミンスク）、ゴメリ医科大学（ゴメリ）に行くことができました。このうちゴメリ医科大学はチェルノブイリ事故後にできた最も新しい大学です。医学部は日本と同じく6年制ですが、薬学部や診断学部は5年制です。

医学部に入るためには高校で良い成績を収めて金メダルや銀メダルを取得するか、入学前のセンター試験で良い成績を収める必要があります。希望者は教育を無料で受けることができます。しかし、無料で教育を受けた学生は卒後の進路選択を政府により決定されます。ゴメリ医科大学では75%の学生が無料で教育を受けていました。またすべての学生がベラルーシで出版された教科書の電子版を無料でダウンロードすることができます。私たち福島医大生は経済格差が持っている教科書の差に現れてしまうという現状があるので、この点に関してはベラルーシの方が上だと感じました。

基本的に2期制で、各学期末に諮問や筆記でテストが行われます。ここでの成績が優秀な学生から順に自分の専攻を決めることができます。人気があるのは外科だそうです。

学生は勉強熱心で、医学への尊敬をもって勉強に取り組んでいます。私たちの世話をしてくれた学生たちは中でも英語学習や国際交流に興味がある学生が多く、とても真面目な印象を受けました。

また、日本にはないシステムで学生のうちから看護師としてアルバイトできるシステムがあります。学生は3年生が終わると様々な病院で看護師としてアルバイトすることができます。決して給料は高くありませんが、病棟で手技を取得できたり、患者を受け持ったりできるのはいい経験になると思いました。

3. ゴメリ医科大学およびベラルーシ医科大学での実習

実習を行うにあたって、自分たちがベラルーシで学びたいことの希望リストを作成し、熊谷先生が両医科大学に交渉していただき実習予定を組んでいただきました。

以下に千葉さんと私のリストと実際に訪問できた講座や機関名を表記します。

人	学びたいこと	ミンスク	ゴメリ
千葉さん	ベラルーシでの医学教育の仕組み	国際交流部	公衆衛生学
	日本との比較	部長へのインタビュー	学長へのインタビュー
	軍事医学で何を学ぶか? 軍医の役割と社会的地位	軍事医学	軍事医学 Liceum
私	チェルノブイリ事故の影響と現在の状況	放射線医学	被爆者の健康管理施設 チェルノブイリ原発 30km 圏内 ホイニキ地区 内分泌病院
	ベラルーシの医療・保健システム	公衆衛生学	公衆衛生学、小児ポリクリニック、 地域病院、female consultation

また、以下に訪問した講座、病院、施設の名称を表記します。

ベラルーシ医科大学

講座：公衆衛生学、放射線医学、脳神経学、腫瘍学、軍事医学、生理学、解剖学

病院：循環器(救急、病棟)、皮膚科

ゴメリ医科大学

講座：公衆衛生学、衛生学、軍事医学

病院：内分泌病院、小児ポリクリニック、地域病院、female consultation

施設：Liceum、Republican research center for radiation and human ecology、チェルノブイリ原子力発電所30km圏内、ホイニキ地区

それぞれについて詳しく述べていきます。

ベラルーシ医科大学

講座：公衆衛生学

Practicalクラスに参加し、中絶や安楽死の問題について話し合いました。Practicalクラスというのは、あるテーマについて1人の生徒が基本事項や自分の意見を発表し、その後ディスカッションするという形式のクラスです。

タチャナ教授にベラルーシの医療システムや統計について講義をしていただき、日本と違うベラルーシのシステムに驚きました。

かわりに私たちは東日本大震災の被害状況、福島県民健康調査の取り組みとこれからの課題、日本や福島の文化について発表し、学生と意見交換を行いました。学生は福島の実況について興味をもって聞いてくれました。これについては後述します。



お世話になったタチャナ先生と
通訳のMaxさんと。

放射線医学

チェルノブイリ事故後を早期、慢性期に分けて被害の状況と社会情勢、食物の品質管理について講義を受けました。スタジャーロフ教授という、日本の研究者とも数多くの共同研究をなされている方に事故後の放射線影響についての研究の話を知ることができました。



講座の放射線測定器(左から3つ)と私たちの持参した測定器(右から3つ)。

脳神経学

脳神経学の教授が大学病院内を案内してくださいました。肝胆の手術や幹細胞管理施設、血管造影室の見学をしました。幹ベラルーシ医科大学の研究所では血液や胆管から採取した細胞を培養し、幹細胞を育てて冷凍保存することで、将来ドナーやその親族が幹細胞による医療を受けられるというシステムがあり、日本での幹細胞を用いた医療の現状とは異なることに大変驚きました。

腫瘍学

皮膚の悪性腫瘍の講義を受けたり、甲状腺癌摘出術の見学をさせていただいたりしました。

軍事医学

千葉さんの興味もあり、軍事医学の講義を受けることができました。

講義では主に災害医学を学び、講義後には軍医の給料や社会的地位などについて質問することができました。

日本とは違い、軍事医学は全医学生必修科目となっています。また、希望する男子学生は夏休みの実地練習の際に軍事訓練に参加することができるそうです。

生理学

血圧と組織の酸素供給度の研究や、高血圧・糖尿病患者の視野を数値化する実験や、健常人を擬似的に低酸素血症状態にして網膜の血管を観察する装置を見せていただきました。これらの多くが手作りでした。

解剖学

解剖学実習室、標本室にお邪魔しました。実習室には生徒が使える模型が多くありました。

標本室では様々な奇形や正常の標本を見て、教授に細かく説明していただきました。脳のクモ膜顆粒、小児特有の頬の脂肪組織、馬蹄腎の標本は初めて目にしました。とても標本の数が多く、80%がソ連時代のものだと教えていただきました。

病院：循環器

循環器病棟や救急、血管造影術を見学させていただきました。

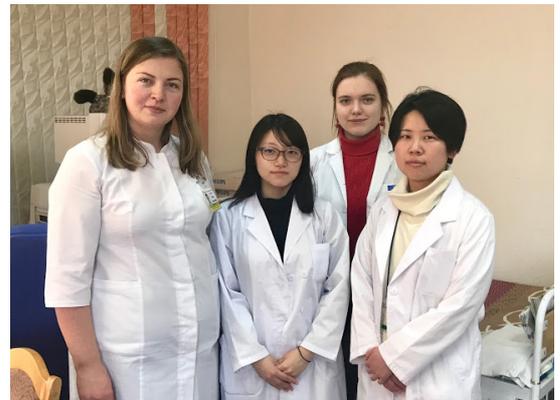
救急では1人の患者に対して40人ほどの医学生が症例検討していました。私たちも患者の心音を聞くことができました。

ベラルーシでも循環器疾患の患者は多く、生活習慣の改善が課題となっているそうです。

皮膚科

循環器病棟の近くにある皮膚科の病棟も見学できました。

重度の乾癬の患者で、間近で病変を見たのは初めてでした。



お世話になったエレナ先生とパリーナさんと。

ゴメリ医科大学



ゴメリ医科大学エントランスにて
元は軍の建物だったそうです。

講座：公衆衛生学

シャルシャコワ教授、アナスタシア準教授に大変お世話になりました。

アナスタシア先生による外国人クラスに参加させていただきました。福島医大とは違い、医療倫理やコミュニケーション問題も公衆衛生学の範囲です。私たちが参加したクラスでは、遺伝子組み換え技術倫理、医療スタッフや患者間とのコミュニケーション問題などを扱っていました。



公衆衛生学のpracticalクラスで生徒の発表を聞く様子。

衛生学

チェルノブイリ事故の概要と現在の放射線影響について講義を受けました。衝撃的だったのは、要素やセシウムの影響だけでなくラドンの危険性について触れていたことです。講義の後は放射線測定器を用いて講義室内と外部の放射線量を比較しました。室内は $0.070 \mu\text{Sv}$ 、屋外は $0.020 \mu\text{Sv}$ と屋外の方が放射線量が低いことを生徒に教えていました。これは建物に微量の放射能物質が含まれているからだそうです。

軍事医学

軍医の役割、災害時の体制などを学ぶことができました。ベラルーシの軍医は普段は自分の専攻医として勤務し、災害時に必要であれば現場に派遣されます。災害対応の体制はとても効率的な仕組みがあります。地区ごとに前線にいる監視員が災害の一次対応をしますが、そこで災害の規模をある程度まで判断し、適切な機関に協力を要請、災害の二次対応以降にあたるそうです。

また、軍事医学の外国人クラスに参加することもできました。授業では災害時の犠牲者の避難について学びました。犠牲者の属性や被害状況を踏まえ、医療提供側が受ける被害を最小限に抑えつつ、大人数をいかに効率よく避難させるかについて考えました。

病院：内分泌病院

内分泌病院ではチェルノブイリ事故後の疾患の傾向について教えていただきました。最も衝撃的だったのは、事故後に生まれた世代は放射線の影響が少ないと言われているのに、有意に甲状腺癌の罹患率が高いという事実でした。この原因はまだわかっておらず、様々なリスクファクターについて調査中だそうです。

また、実際の診察室にも邪魔できました。

小児ポリクリニック

ベラルーシではポリクリニック制度を採用しています。全ての人は受診する際にポリクリニックに行き、診察、検査、治療を受けます。この小児ポリクリニックには眼科医、内分泌医、整形外科医がいますが他科の疾患で高度な専門性が要求される場合にはもう少し高次の地区病院、地域病院に行くことになります。

ポリクリニックは基本的に予約制です。

Специальность	Ф.И.О.	№ кабинета	№ кабинета	ТОПЕЛЬНИК	ВТОРИК	СРЕДА	ЧЕТВЕРГ	ПЯТНИЦА	СУББОТА
РЕАБИЛИТОЛОГ	Кушчицкий Александр	23	24	25	26	27	28	29	30
ПСИХОЛОГ	Мельниченко Дарья Николаевна	18							
ОРТОПЕД-ТРАВМАТОЛОГ	Ермаков Валерий Григорьевич	11							
ХИРУРГ	Дедович Наталья Игоревна	11							
ОФТАЛЬМОЛОГ	Гусакон Елена Петровна	6							
ОТОЛАРИНГОЛОГ	Глушко Валерий Вячеславович	7							
ПЕДИАТР	Черванин Алексей Николаевич	7							
ПЕДИАТР	Бабошев Павел Григорьевич	4							
ПЕДИАТР	Синько Эльмира Николаевна	9							
ПОМОЩНИК ВРАЧА	Конанц П.А. Пырякова Н.В.	2							

受付の予約表。

医師の名前と予約可能な時間帯の掲示版です。



患者教育のポスター。

健康状態への影響は生活習慣因子が最も高く、医療の介入による影響は8-9%と最も低い、と書いてあります。

ここでは往診も行なっています。子供が急に具合が悪くなった時、親がここに子供を連れてこられないときにポリクリニックに電話をかけると医師が駆け付けてくれるというサービスです。私たちが訪問した時期はちょうど感染症が流行っている時期で、1人の医師が40人をクリニックで診察し、11人に往診した日もあると伺いました。ベラルーシでも小児科は激務のようです。

地域病院 Regional hospital

学生のArthurくんがここの救急科でアルバイトしているので連れていってもらいました。

24時間患者を受け入れ、初期治療や簡単な治療はここで行います。必要であれば他の科の医師にコンサルします。コンサルを受けた医師は目の前の仕事よりも優先的に救急科の患者を見る必要があるそうです。

機械類などはやや新しく、中国のものが安価でクオリティも高く人気があるそうです。

Female consultation

女性は定期的に自身の健康状態、妊娠状態を確認するためにここに受診します。パートナーの男性もともにくることが推奨されています。また、妊産婦の教育も行なっています。妊婦には妊娠に関する知識を教えるための胎児の写真や模型、産婦には授乳や日々の子育てできをつけるべきことを教育できる部屋があります。虐待防止などのポスターも貼ってありました。

妊産婦用のカルテを拝見しましたが、基本情報、既往歴、検査項目など役10ページに渡っており、かなり時間と手間をかけた手厚い診療を行っている印象を受けました。

現在、女性たちは放射線の影響についてはそれほど心配していません。それよりは他のことに関心があるようです。

施設 : Liceum

将来的に災害対応に当たる職業に就くための訓練学校を見学させていただきました。

様々な非常事態を考慮し、シミュレーションを体験できる部屋がたくさんあります。

私たちが見たのは、森林、人命救助、湖、火災現場、放射線災害、交通事故、不審物・不審人物などの設備がでした。

人命救助ではハイムリッヒ法を練習しました。自分より大きな体格の人にハイムリッヒ法を行うのは見た目より筋力があるということが分かりました。特に前腕の筋肉が足りなかったと思います。

また、ベラルーシならではの演習だと思ったのは凍った湖に落ちてしまった人の救助訓練です。

湖の氷が薄い時期に乗ると氷が割れてしまい、氷点下の湖に溺れてしまいます。救助する側も側に行くと同じように落ちてしまう仕掛けになっていて、少し離れた安全なところから長い棒を使って救助するというのが正しい方法だそうです。私たちも体験させていただきました。



安全な場所から長い棒を使って助けます。

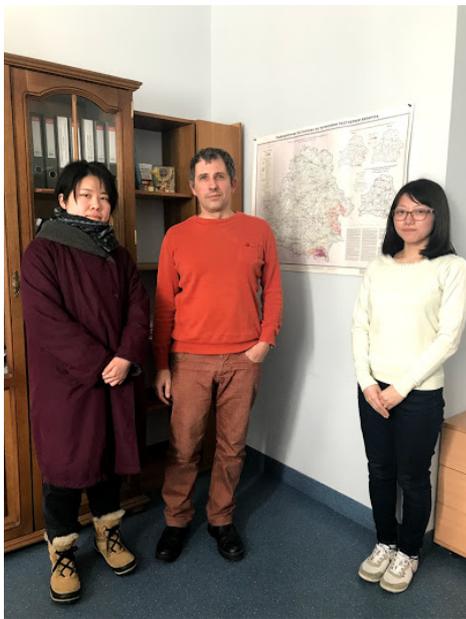


自分も近づくと湖に落ちてしまう危険があります。

Republican research center for radiation and human ecology

チェルノブイリ事故後の健康管理システムの中核機関に訪問させていただきました。

被爆者たちを、当時の避難者、住民、事故処理作業班、その子孫たちの4つにグループ分けして電子カルテに被爆量、健康管理、疾患や治療を記録し、疫学的調査に用いています。どのグループでも甲状腺癌発症率はベラルーシ全体と比べると高いけれども、死因の割合はベラルーシ全体と同じく低いと伺いました。



疫学研究室長と。

壁に貼ってあるのは現在のベラルーシ共和国の汚染状況の地図です。

チェルノブイリ原子力発電所30km圏内の自然保護区
今回、幸運なことに30km圏内に入る許可がいただくことができました。30km圏内は立ち入りが制限され、放射性物質が動植物に及ぼす影響を調査、管理する施設があります。私たちは養蜂場、バイソン飼育場を見学しました。



管理施設の先生方、ゴメリ医科大学のバラパーエフ先生、
シャルシャコワ先生、アナスタシア先生と。

ホイニキ地区

30km圏内からは外れますが、そのかなり近くにあるホイニキ地区で、小学校、病院、博物館に訪問しました。

最も印象に残っているのは右の写真の学生の食品管理の実習です。

小学校のクラブ活動の一環として食物の放射線濃度を測定、管理しているようで、その様子を見せてくれました。写真では干しキノコの線量を測定しています。

子供達は自主的に活動に参加しています。クラブに入っていない友人や親に活動内容を話すこともあるそうです。



4. チェルノブイリ事故の影響と現在の状況

チェルノブイリ事故の特徴を簡単にまとめます。

早期は事故直後～地上の放射線影響がなくなるまでとされ、チェルノブイリ原発から放出された放射性物質は天候の影響によりウクライナというよりはその北のベラルーシに大きな被害をもたらしました。

被害は主に β 、 γ 線の服、皮膚への外部被曝でした。事故発覚後、約12日間をかけて国による大掛かりな避難が行われました。

慢性期はその後から今に至るまでとされ、慢性期の最もネガティブな事実としては、ソ連政府による情報統制があったことが挙げられます。事故は他国の放射線測定の異常高値により指摘され、発覚しました。

発覚後は事故処理作業が行われました。爆発の火を止めるために特別な装置なく清掃人 (liquidator) が砂や化学物質を投与したため大量に被爆したと予想されています。

従事した人々、その子孫など事故で被爆したと思われる人々の健康管理が今も行われています。

若い世代が事故についてどう思っているか何人かに聞いてみたところ、彼らは事故を歴史の一部として捉えていました。教育の過程でももちろん事故について学びますが、自ら興味を持ってさらに調べる人はほとんどいません。また、チェルノブイリ事故は昔のテクノロジーが原因で起きたものという認識なのでベラルーシ国内に新しくできた原発についても不安はないようです。彼らの関心は事故や放射線のことというよりは身近な学業、経済的なこと、将来の進路に向いているのだと感じました。

5. ベラルーシの医療・保健システムについて

ベラルーシの医療システムの大きな特徴は2つ。1つは先述したポリクリニック制度、もう1つは医療費無料ということです。ポリクリニック制度については先述した内容を参照いただきたいと思います。

ここでは医療費無料について記述します。

ベラルーシの病院はほぼ90%が政府病院 governmental hospital、残りの少数は私立病院 private hospital と、政府・私立の混合病院だそうです。政府の病院はとても混雑していて待ち時間が長いです。私立の病院では、待ち時間を短縮するために代金を払います。ただしごく少額で、200円から300円ほどだと聞きました。これは医療費では無いので、政府病院でも私立の病院でも医者の給料は変わりません。

医療費無料は患者としてはありがたい制度ですが、私は2つの問題があると感じました。1つは医療の価値が下がるということです。無料で医療にアクセスできることで、他の有料なものより医療の価値が低いという錯覚が起こり得ます。医療に対する尊敬の念は失われ、医師や医学生が激務をこなすモチベーションを保つのは難しいと考えられます。これは医療の質の確保に問題を起こしかねません。

問題の2つ目は、人々が健康状態に気を払わなくなるということです。健康な状態を保つためには、食事、運動、飲酒、喫煙などの生活習慣に注意する必要があります。ベラルーシでは人々が自身の身体状況に気を遣わない傾向にあります。糖尿病などの生活習慣病の末期になって救急外来を訪れてももう手遅れということも多くあるそうです。

6. 放射線量測定

空間線量計、積算線量計で現地の放射線量を測定していました。

空間線量は30km圏内以外では日本と同じほどの値を示していました。30km圏内では $0.495\mu\text{Sv}$ を超え、かなり高いことがわかりました。

積算線量計は日本から出国した後～帰国した時までの37日間で $70.5\mu\text{Sv}$ でした。ICRPの基準を取り入れた原子力保安委員会の方針は年間 1mSv までが許容範囲です。1年は365日ですので、 $70.5\mu\text{Sv}\times 10=0.705\text{mSv}$ で、許容範囲内に収まっているということがわかります。

7. 福島を紹介

チェルノブイリ事故やベラルーシについて学ぶ傍、福島や日本の紹介をするためにスライド発表を行いました。

千葉さんは東日本大震災の被害と福島の文化について、私は福島県の県民健康調査と日本の文化について発表しました。2人合わせて英語で45分間ほどの発表でした。かなり情報量は多くなってしまいましたが、とても好評でした。

大学や高校で東北の震災について扱うことは少なく、当事者の私たちから話を聞くことができ良い経験になったという感想をいただきました。福島や被害を受けた東北は復興に向けて一歩ずつ進んでいますが、誤った情報に起因する差別や風評被害が問題になっています。このような状況でベラルーシの人々に正しい状況を知ってもらえるというのはとてもいいことだと思いました。



ミンスクで発表を聞いてくれた医学部6年生の学生、通訳を担当してくれたMaxさんと。



ゴメリでの発表風景。

8. 学生生活

留学中は寮の部屋を与えていただき、基本的に千葉さんと2人暮らしでした。

ミンスクでは朝・昼ご飯が寮で提供されました。ゴメリでは自分たちで用意していました。

洗濯は寮の洗濯機で行いました。ミンスクでは寮母さんをお願いして洗濯機を使わせてもらいますが、寮母さんは英語を話せず、理解できないのでGoogle翻訳を使ったり、覚えた簡単なロシア語を用いたりしてコミュニケーションをとっていました。



ミンスクの寮の部屋。



ミンスクの寮のキッチン。



自分で用意したある日の朝ごはんです。

乳製品、サラミがとても美味しかったです。



ゴメリでのお昼ご飯。私はベラルーシのスープ

(ラツソリニ、サリャンカ)が好きで毎日食べていました。



ベラルーシのお店で食べた定番料理を紹介します。

まずはドラニキ。ジャガイモのパンケーキで、通常はスメタナと呼ばれるサワークリームと、ペトロシュカというハーブと一緒に食べます。



こちらは小麦粉のパンケーキ。



日本のパンケーキとは違いクレープに似ています。左の写真ではジャムや生クリームと食べました。

右の写真はもう少し分厚いパンケーキで、キノコと豚肉のソースにつけて食べました。

次に、定番ではないですが、興味深いと思ったベラルーシの料理を紹介します。



ベラルーシのお寿司バーでお寿司を食べました。1貫で150円とベラルーシにしては少し高めです。

味は日本のものより劣りますが、形は日本のお寿司とかなり似ています。



サラミのおつまみセットです。

”salo”と言って脂肪分たっぷり、塩味濃い目のサラミは私のお気に入りです。サラミを手作りする家庭もあるそうです。



カフェで食べたマッシュルームの肉チーズ詰め。
スープがたっぷり染み込んで、とても美味しいです。

基本的にベラルーシのご飯は日本人の口に合うと思います。

9. 文化交流

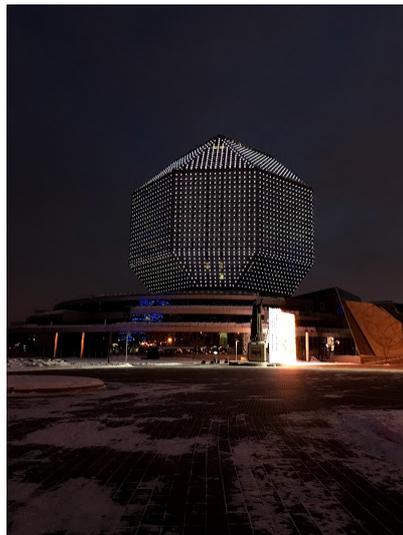
ミンスクでもゴメリでも、本当にたくさんの観光名所に連れていってもらいました。観光名所ではロシア語の説明がついていることが多く、学生に訳してもらいました。

ミンスクでは、ロシア正教会、博物館、ショッピングモール、カフェ、動物園、植物園、国立図書館、戦争博物館、サーカス、Maxim Gorky Park、Zero kilometre sign at October Square、Island of Courage and Grief and temple-monument to Sons of Fatherland, who Died Its Borders、Galileo、ジオラマ博物館、Underground Shopping Centre、Theatre、Souvenir Shop、Ice skate link に行きました。

ゴメリでは、Paskevich 宮殿公園、ロシア正教会、展示館、植物園、Art Gallery、戦争博物館、カフェ、Lake、St. Nicholas Monastery in Gomel、サーカス、町歩き、Souvenir Shop に行きました。



アイススケートのサーカス。



国立図書館。



国立バレエ劇場にて。



ミンスクの第二次世界大戦の博物館にて。



ジオラマ博物館には各地域の観光名所のジオラマがあります。



ソ連時代からの重厚で巨大な建築物たち。

ミンスクではミンスク国立言語大学の日本語学習クラスにお邪魔させていただきました。



みなさん熱心に日本語を勉強しておりとても上手でした。前列左から2番目のアナスタシアさんは日本語スピーチ大会でこの前優勝したそうです。テーマは「私のお気に入りの日本語」だそうです。おめでとうございます！

10. ベラルーシの人々

ベラルーシの人々はとても穏やかで優しいです。どこにいても、どなたにお会いしても、日本という遠い国から来た私たちをもてなしてくれました。人の意見を尊重し、争い事は好みません。

ベラルーシ人のもう1つの特徴として細かいことを気にしない、大雑把だということが挙げられます。時間は守りますが、次の日の予定や先のことまであまり考えません。



どの講座や施設に行ってもコーヒーや紅茶、お菓子やチーズなどでおもてなししてくれます。

11. 今後ベラルーシに留学されるみなさん、ベラルーシ留学を考えているみなさんへ

どのような人が留学に向いているか、どのような能力が身についたか考えてみました。

最も重要だと思うのは、異文化を知る意欲とそれに対して敬意を払うことです。

ベラルーシは陸続きの国で、ベラルーシ人だけでなく様々な文化圏からの住民がいます。私たちと異なるバックグラウンドを持って日々生活している彼らと語り合うことは、掛け替えのない経験となりました。彼らの文化を理解し、尊重する姿勢は必要不可欠です。逆に、こちらから日本を紹介する機会も多くありました。日本人の気質は理解されづらいところがあるので、説明に苦労しました。

コミュニケーションの観点からは、自己紹介を含め、実習や学習の中での感想や疑問を躊躇せずに口に出せる能力が必要とされます。日々のコミュニケーションは英語で行われるので英語力は上がります。ただし、ネイティブスピーカーほどの英語力は要求されません。表情や身振り手振りで感情表現ができると言いたいことが伝わりやすいです。

最後に、ベラルーシ留学が決まった時は不安でしたが、留学を終えた今は挑戦してよかったと思っています。ベラルーシ留学を考えているみなさん、ぜひこの機会に挑戦してみてください。自分が想像もつかないような世界が広がっていて必ず成長することができると思います。

12. 謝辞

今回の留学にあたり、数多くの方々にお世話になりました。

放射線健康管理学講座の大津留先生、緑川先生、逸見先生、小泉さんには、福島県の健康調査についてお話を伺ったり、外来見学をさせていただいたりと基礎上級期間に大変お世話になりました。また、放射線災害学習センターの熊谷先生はベラルーシの先生がたと共同研究もされているベラルーシのエキスパートです。先生のおかげで無事にベラルーシに到着することができ、有意義な研修期間を過ごすことができました。

そして免疫学講座の関根先生、解剖組織学講座の和栗先生、システム神経学講座の永福先生、企画財務課の國分さんは国際交流プログラムを通してお世話になりました。

解剖組織学講座のエレナ先生と教育研修支援課の加藤さんにはロシア語の講義をしていただきました。

私達が留学期間を有意義に過ごせたのは、先生方に助言や指導をいただけたおかげです。

本当にありがとうございました。